

日本語のスル動詞と韓国語의하다動詞から見た日韓両言語のナル性

森山新（お茶の水女子大学大学院）

moriyama.shin@ocha.ac.jp

1. はじめに

韓国語にも日本語のスル動詞に対応する「하다 (hata) 動詞」が存在する。日本語のスルには韓国語の하다、日本語のナルには韓国語の되다 (toita) が対応するかのようと思われるが、そこには微妙なズレがある。例えば、(1)に対応する韓国語は(2)のように하다は用いることができず、(3)のように되다가使われる（生越 1982）。

- (1) A氏が大統領に当選した。
- (2) *A 씨가 大統領으로 當選하였다.
- (3) A 씨가 大統領으로 當選되었다.

このように一般には日本語と韓国語とは似た言語であると言われることが多いが、漢語動詞の使い方にはズレが見られる。このズレは事態をどのように把握するかという事態把握の違いが関わっている。

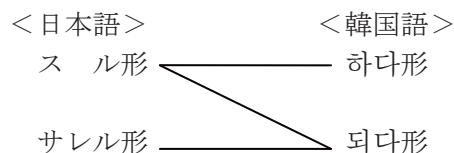
本稿では日本語のスル動詞と韓国語의하다動詞の違いを通じ、両語のナル性に違いが見られること、それは両言語の主観性の違いが関与していることを明らかにしていく。なお、韓国語の漢語動詞には直接되다가接続できるが、日本語の場合には、ナルは付かず、受身形サレルが付くことが多い。ナルを付けようとするれば、ニを加えてニナルとせざるを得ないが、ニナルが付く漢語は、延期ニナル、解除ニナルなどそれほど多くはない。しかもそれらには延期サレル、解除サレルという形もあり、そちらの方が広く使われることから、本稿では韓国語では하다/되다、日本語ではスル/サレルを中心に見ていくことにする。

2. 日韓の漢語動詞の異同

漢語動詞の日韓対照及びそれを日本語教育に応用することをめざした論文は多数(安 1989、李 1985、生越 1982、金 2008、都・黄 (2007)、南 2003、韓 2000、韓 1990、1992、裴 2006、澤邊・安井 2008 など)があるが、本稿では特にその中でも生越 (1982) を取り上げて論じる。

生越 (1982:54-55) によると、日本語のスル

／サレルと韓国語의하다/되다の対応関係は以下のようなになる（本稿の表記に合わせ、一部表記を変更している）。



- I 日本語スル形—韓国語하다形
欠席する—欠席하다
開催する—開催하다
- II 日本語スル形—韓国語되다形
感染する—感染되다
判明する—判明되다
- III 日本語サレル形—韓国語되다形
開催される—開催되다
発行される—発行되다

生越は日本語のスル/サレル、韓国語의하다/되다の対応は非常に生産的であり、日韓両語の「特徴の最も基本的な部分が表れている」として注目している。その点から両語の言語類型論的特徴の異同を考える上に参考になる可能性がある。

日本語のスル/サレル、韓国語의하다/되다の異同を考えてみると、大抵はI、IIIのように、「日本語スル形—韓国語하다形」、「日本語サレル形—韓国語되다」が対応し、日韓両語の共通性が表れているが、IIの「日本語スル形—韓国語되다形」という対応は日韓両語の相違を明らかにしている。本稿では日韓両語のナル性の相違を明らかにすることを目的としていることから、以下ではIIを重点的に見ていく。

- (4) a 彼はどんな苦しい時でも挫折しなかった。(하다/?되다)
b 計画が挫折した。(*하다/되다)
- (5) a 聴衆は緊張して演説を聞いた。(하다/?되다)
b 核兵器の問題で国際関係が緊張している。(?하다/되다)

(4) (5)はどちらも自動詞のスルであるが、これを見るとどちらもスル形が用いられている。しかしこれに対応する韓国語を考えると、(4a) (5a)では하다가、(4b) (5b)では되다가自然である。この違いについて生越は、主語が「動作主」かどうか、すなわち「動作の実現をコントロールできるかどうか」により(6)のように하다/되다の使い分けが生じているとしている。

- (6) 하다：主語が動作主／動作の実現をコントロール可（能動態）
되다：主語が動作主でない／動作の実現をコントロール不可（中相態）

また、日本語では主語が「他からの働きかけ」を表現しない場合にはスル形が用いられるが、韓国語ではこのような場合には하다形は用いることができず、되다形が用いられるとしている。

次に生越ではサレル形と되다形の違いについて論じている。結論だけを述べると、日本語のサレル形は「常に主語に対し積極的な働きかけを行なう動作主の存在を前提として成り立っており、中相態のように、「他から主語に対する働きかけ」が明示的に示されていない場合にはスル形が用いられる。これに対し、韓国語の되다形は、「他から主語への働きかけ」があれば、それが明示的かどうかは関係なく用いられる、言い換えれば「主語に動作を起こす力（自発性）がない」場合には되다形になるとしている。

以上、生越（1982）をもとにスル／サレル、하다/되다の違いを概観してきた。これを図に示すと図1のようになろう。図でSは認知主体の視点が向けられて主語になっていることを示している。また破線は「他から主語に対する働きかけ」が背景化し、「認知主体の注意の範囲（スコープ）」から外れている場合である。

(a)は自動詞の場合、(b)は他動詞（能動態）の場合、(c)は他動詞（受動態）の場合である。これらについては、日韓両語に基本的に差は見られず、スルには하다、サレルには되다가対応している。問題は(d)でスルに되다가対応し、ズレが生じている。これが生越の「Ⅲ日本語サレル形－韓国語되다形」に相当する。

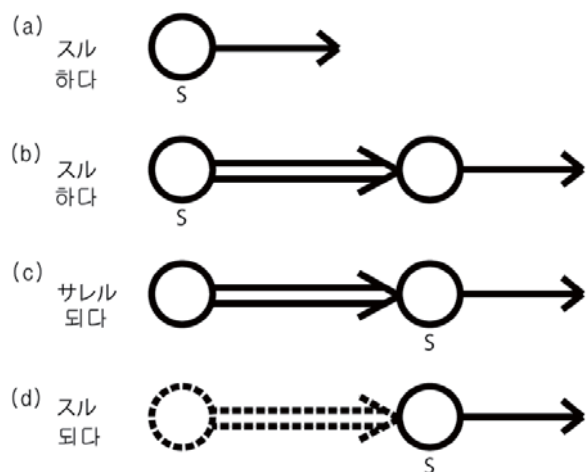


図1

3. 日韓の漢語動詞のナル性の違いとその原因

最後に図1 (d)のようなズレはなぜ生じたのかについて、本ワークショップのテーマである日韓両語の「ナル性（事態把握の主観性）」の観点から考察してみたい。

(d)は客観的事実としては、主語となる参加者が他の参加者から働きかけを受けている。しかし働きかけを行っている「他の参加者とその働きかけ」は認知主体の注意の範囲（スコープ）からは外れ、日韓両語ともに「被動作主（もしくは働きかけを受ける参加者）」が主語になっている。日本語では「認知主体の注意の範囲（スコープ）」という主観的要因が重視され、本来、動作主、もしくは働きかけ（エネルギー連鎖）の起点でないにも関わらず、動作主／働きかけの起点としての扱いを受けてスルが選ばれたのである。つまり「動作主／働きかけの起点」の決定が認知主体（話し手）により主観的に決められている。これに対し韓国語では、認知主体（話し手）が事態をどう見るか、といった主観的要因はあまり重要な影響とはならず、むしろ「他の参加者からの働きかけがあるかどうか」という客観的要因が重視されて되다가選ばれている。

この結果は日本語では(a) (b) (d)でスルが用いられているのに対し、韓国語では(a) (b)でしか하다가が用いられておらず、日本語のほうが韓国語に比べスル／하다の守備範囲が広いことを示している。このことはサレル／되다を見ると韓国語のほうが日本語に比べサレル／되다の守備範囲が広いことを意味する。実際韓国語では(c) (d)で되다가が用いられるが、日本語

では(c)のみでサレルが用いられている。このことは一見すると韓国語のほうがナル性が強いことを示しているように見える。しかしよくよく考えると、日本語のスルは(d)のような動作主性のないスルをも含んでおり、その意味で日本語のスルは一部ナル化している。すなわち日本語のスルは하다に比べるとナル性が強くなっている。これは日本語が事態を「認知主体の見え」から見つめた結果、事態がどのように「なったか」を言語化しているのに対し、韓国語ではこうした「事態を認知主体の見えから見つめ、事態がどのように「なったか」を言語化している」という「ナル型言語の特徴」は日本語に比べて弱く、むしろより客観的に事態そのものを見つめ(客観的把握)、その結果、動作主性が認められるものについては하다を用いるが、動作主性が認められず、むしろ「他の参与者からの働きかけ」が存在するようなものに対しては、되다を用いているのである。

4. まとめ

以上、日本語のスル動詞と韓国語の하다動詞から日韓両言語のナル性を比較してみた。両者を比べると日本語のほうが事態を主観的に把握する傾向が強く、その点ナル型言語であり、それに比べると韓国語は事態を客観的にとらえ、日本語よりはナル性が弱いことがわかった。ただしこのことは、スル動詞/하다動詞の比較において言えることで、他の言語項目すべてにあてはまるというわけではない。個々の言語項目についてさらに研究をしていく必要がある。

参考文献

- 安秉杰(1989)「日韓両語の対照研究－漢字語動詞の格支配を巡る諸問題について－」『広島大学大学院教育研究科博士課程論文集』15:119-125
- 李光秀(1985)「日本語「スル」動詞と韓国語「hada」動詞の対照的研究」『日本語と日本文学』5:1-11、筑波大学国語国文学会
- 生越直樹(1982)「日本語漢語動詞における能動と受動－朝鮮語 hata 動詞との対照－」『日本語教育』48:53-65、日本語教育学会
- 金良宣(2008)「한국어 ‘VN 하다/되다’ 로 대응하는 일본어 ‘VN する’」

- 『日本学報』74:15-36、韓国日本学会
- 都恩珍・黄情児(2007)「韓国語の「되다(doeda)」被動文の意味的特徴に関する一考察－日本語の「漢語＋する」形に対応する場合を中心に－」『桜花学園大学人文学部研究紀要』9:99-115
- 南英福(2003)「日本語「する」와 韓国語「하다」의 対照研究－意味用法의 相違点を 中心으로 해서」韓國外國語大學校日語日文學科博士論文
- 韓先熙(2000)「日本語と韓国語の漢語動詞について－日本語教育の立場から－」『ことば』21:137-151、現代日本語研究会
- 韓有錫(1990)「漢語動詞「－スル」と「－todda」の日韓対照研究」『名古屋大学国語国語学』67:120-103、名古屋大学国語国文学会
- 韓有錫(1992)「併存する漢語動詞について－韓国語との対照考察－」『名古屋大学国語国語学』70:86-75、名古屋大学国語国文学会
- 裴晋影(2006)「日韓の「漢語＋スル・hada」動詞の対照的研究－新聞社会面の動詞に注目して」『東北亜文化研究』11:421-434、東北亜細亜文化学会
- 澤邊裕子・安井朱美(2008)「韓国人学習者の日本語漢語動詞の習得に関する一考察－韓国で学ぶ学習者と日本で学ぶ学習者を対象に－」『第二言語としての日本語の習得研究』11:141-159、第二言語習得研究会